

# たった一枚の写真から

出逢いと奇跡

すず 著

Copyright © 2022 Suzu All rights reserved.

# 目次

はじめに

初めて聞いた国の人と、初めての海外文通

記憶を呼び覚ました、真っ赤な夕日のポストカード

インド洋に沈む真っ赤な夕日のビデオ

月刊モーリシャス掲示板での Jean Pierre さん探し

Jean Pierre さん見つかる！

朝日新聞に

37年越しの初対面

Mountain cannot meet, but people can

終わりに



## はじめに

何年も音信不通になっていた友人を、ふとしたきっかけで思い出し、会いたくなる。誰しもがそのような経験をしたことがあると思います。しかし、どうすれば会えるのか分からず、そのまま時間が過ぎてしまうことがほとんどではないでしょうか。

音信不通となっていたモーリシャス人の文通友達 Jean Pierre さんに会いたいという長年の夢が、たくさんの人々の力を借り、不思議な巡り合わせと、「叶えるんだ！」という強い意思の元、37年目にして現実となった私のドラマチックなお話をさせていただきます。





## 初めて聞いた国の人と、初めての海外文通

私が Jean Pierre さんと文通を始めたのは、1965 年の高校 2 年生の時、担任の先生から「海外の人たちと文通をしてみないか」と勧められたのがきっかけでした。

聞いたことのないあまりメジャーではない国「モーリシャス」国名に興味を抱き、文通を始めることにしました。当時使い慣れていなかった英語で、辞書を片手に自己紹介の手紙を送ってみました。わくわくしながら返事を待っていたところ、モーリシャスの Jean Pierre という青年から、Airmail が届いたのです。中には 1 枚の写真と手紙が入っており、写真の裏には名前のサインとメッセージが！



Miss Maurice  
lots of love  
from  
Jean Pierre.

この手紙をきっかけにモーリシャスへの興味を深め、ペンパルとの交流に喜びを見出し、忙しい毎日の合間を縫って、年に5、6回の文通を続けました。

しかし、学校生活が多忙を極める高校3年生になると、やがて手紙の往来は途切れ、手紙も時間とともにどこかに紛れてしまいました。

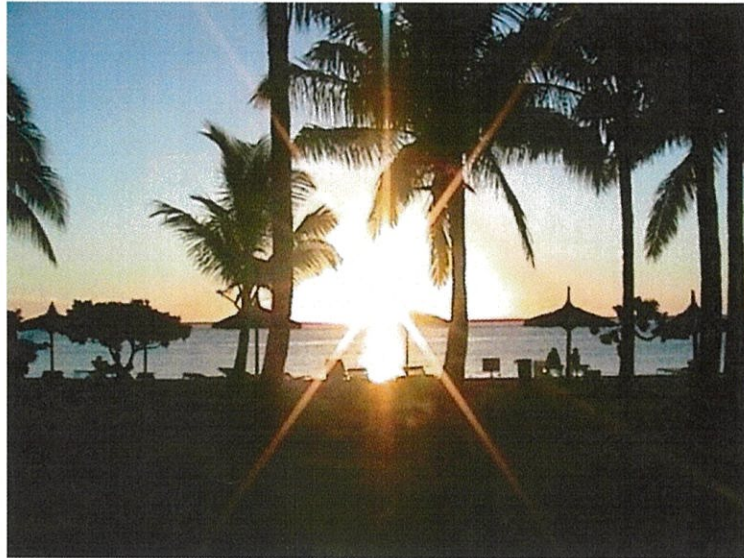
私が、モーリシャスと文通友達 Jean Pierre さんのことを再び思い出すのは、そ

れから長い月日を経た 1990 年、1 枚の美しい写真と出会った時のことでした…。

## 記憶を呼び覚ました、真っ赤な夕日のポスト カード

Jean Pierre さんとの文通が途切れて  
20 年以上が過ぎた頃、私は結婚し、主人と  
そば屋を経営しておりました。

1990 年のある日、お店にヒロ子さん  
というお客様が来店され、おそばを食べ終  
ると、真っ赤な夕日のポストカードに宛名  
書きを始めました。その写真のあまりの  
美しさに気づくと私はヒロさんに声を掛  
けていました。



すず「素晴らしい写真ですね、どこの国の夕陽ですか？」

ヒロ子さん「モーリシャスよ！インド洋に沈む夕陽です。綺麗でしょう！」

アメリカ人のご主人を持つヒロさんは、通訳の仕事でモーリシャスに行って来たのだそうです。

すず「えっ！モーリシャスって、マダガス



カル島の横の？」

ヒロ子さん「あなたモーリシャス知っているの？行ったことあるのですか？」

すず「行ったことは無いけれど、高校時代にモーリシャスの人と文通をしていたんです！」

ヒロ子さん「とっても素敵なところだから、あなたも絶対に行ってらっしゃいよ！ビデオも持っているから貸してあげるね！」

このヒロ子さんとのポストカードとモーリシャスの話に触れ、高校時代の文通の思い出が蘇り、いても立ってもいられなくなった私は、すぐに押入れをひっくり返し、高校時代のアルバムからセピア色になった Jean

Pierre さんの顔写真を見つけ出しました。

それからはモーリシャスに行ってみたくらい  
と思い始め、行くのであれば当時の文通相手  
Jean Pierre さんを捜して逢いに行きたい、  
という思いにかられておりました。

早速、この顔写真と裏に書かれた名前を頼  
りに、領事館などに Jean Pierre さん捜し  
を依頼したり、月刊モーリシャスの現地駐在  
員の方（みどりさん）に電話をし、相談もし  
ました。

しかし現地から、「国の人口がわずか  
120 万人だとはいえ、Jean Pierre さんの  
同姓同名は大勢おり、本人を特定することは  
不可能でした」との返事を受けてしまいました。  
た。

これに加え、モーリシャスのビデオを貸し  
てくださる予定だったヒロ子さんが、急遽ご

主人の仕事の都合でアメリカに帰国、モーリシャスの話ができなくなってしまう、一旦 Jean Pierre さん捜しを諦めざるを得ず、日常生活へと戻っていったのです。

再び Jean Pierre さん捜しが動き出したのは、それからさらに 8 年後のことでした、、、

## インド洋に沈む真っ赤な夕日のビデオ

ヒロ子さんとアメリカ人のご主人がアメリカに帰国してから8年たった1998年のある日、ヒロ子さんのご主人さんが我が家を訪ねて来ました。すごくやつれた姿でしたのでびっくりでしたが、ヒロ子さんが1997年に病気でなくなったことを私に伝えたかったそうなのです、。

訃報を聞き、ご主人にヒロ子さんとの思い出や、ヒロ子さんに見せてもらった“夕陽の絵ハガキ”がきっかけでモーリシャスへの想いを新たにしたこと、文通相手のJean Pierreさんとモーリシャスで会いたいという夢をヒロ子さんと語り合ったことを伝えました。

その後、帰国したヒロ子さんのご主人は、ヒロ子さんが撮影したモーリシャスのビデオを私に送り届けてくれました。

そのビデオを見た途端、その美しい光景に圧倒され、私のモーリシャスへの想いが再び高まりました。インド洋に沈む真っ赤な夕陽は忘れられない光景となり、必ず自身の目で見てみたいと思いつめるのでした。

ヒロ子さんのご主人は、「旅行好きだったヒロ子が気に入っていたモーリシャスに、私も是非行きたいと思う」とおっしゃって、モーリシャスへ行き Jean Pierre さんに会うという夢の実現に向けて、手紙の翻訳などで協力してくださることになりました。

しかし、またしても私は 8 年前と同じ壁に突き当たってしまいました。どのように Jean Pierre さんを捜せば良いのか、、色々捜し出す手段をしてはみても、不可能という返事が返ってきてしまいました。たった1枚の写真と名前だけで見つけ出すのはやっぱり無理なのだと諦めかけていた頃、我が家にパ

---



ソコンなるものがやって来ました。息子がお店のホームページを作るのを見ながら、“そうだ、このホームページを利用してみよう！”と考えた！

## 月刊モーリシャス掲示板での Jean Pierre さん捜し

早速、1999 年には自分のパソコンを購入し、息子の友人に e メール・インターネットブラウザの使用方法を教えてもらい、インターネットを一通り使えるようになった私は、2000 年9月、「地球の歩き方」で見つけた「月刊モーリシャス」の掲示板に、“マイドリームに力を貸して下さい”というタイトルの書き込みを行いました。

「たった1枚しかない写真の人を捜し、会いに行きたいのです。」

こんなタイトルで、私の青春の続きを夢として書き込みました。

その書き込みに対して返事が来ていないか毎日チェック…、残念ながら長らく反応が返って来ませんでした。

2、3ヶ月が過ぎ、「なんて無駄なことをしているのだろう、、、」そう諦めかけた時、協力を申し出てくれる方が現れたのです。

「来年の2月にモーリシャスに行きますので、知人に頼んで調べて来てもいいですよ。」と、書き込みをして下さったのです！

「私の夢にまた一步近づいたようで、胸がドキドキしました。」

胸を高鳴らせながら、私はその方に Jean Pierre さんの写真を託しました。

果たして写真とサインだけで見つかるだろうか、不安と期待を抱え、私は待ちました。

## Jean Pierre さん見つかる！

息子のパソコンに Jean Pierre さんを見つけたという知らせが入ったのは、探し始めてから 1 週間目、2001 年 3 月 17 日のこと。

それはまさに奇跡的な出来事でした。

私から写真を受け取りモーリシャスへ旅立った方は、JNT モーリシャス支社の現地スタッフのみどりさんに写真を託し、ロドリゲス島にダイビングに行きました。

写真の裏のサインを見たところ、みどりさんの同僚に同姓同名の方がいらっしゃり、心当たりを探してくれることになったのです。

まずは Jean Pierre さんと同姓同名の人が多いローズヒルを中心にスタートです。しかし、四方八方聞きまわりはしたものの、手がかりが無いまま時間が流れてしまいました。

そんなある日、自分の時計を修理に出していたお店でダメで元々写真を店長に見せ、明日新聞に投稿でもしようかなーと話をしていたところ、たまたまレジ待ちで並んでいた少年が、突如として「それ、僕の叔父さんだよ！」と叫んだそうです。

発見のお知らせを受けた私は「うわー、本当！？信じられない！こんなことが世の中にあるの！？」と、あまりにドラマチックな展開に、現実とはにわかに信じられなかったです。

みどりさんが確認に行ってくれ、本人も文通の件を思い出してくれたとの事でした。同時に手紙を書いてくださいとのメッセージが…、50歳を過ぎてからの英文の手紙はとても困難でしたので、ヒロ子さんのご主人に助けてもらい、今までの経緯とマイドリームの件を書いてみました。



その後は、Jean Pierre さんもパソコンが入ったらしく、英文のメールを交換できるようになりました。

「1 日も早くモーリシャスを訪れ、Jean Pierre さんに会いたい！」

又一步、自分の夢が現実となる日が近づいていました。

## 朝日新聞に

モーリシャスに行きたい！早く逢いに行きたい！

思いつめる毎日が続き、どうしても行きたいけど仕事のことや子供達の事、休みを8日間とれるかな？密かに計画を練った私ですが、問題が山積みで3年が過ぎました、、、

そして、2003年やっとGo Signが出たのです。

11月13～20日に日程も決まり、主人が行くことができないので、姉と行く事になりました。すごいワクワクの中で、仕事をしておりました。

10月末の花金の夜、常連のお客さんの話題の中に、インターネットを通して、記事になるような事はありませんか？という問いかけがありました。

新聞記者に成って間もない彼女だったのですが、お酒を飲みながらも情報収集をしていたのです。

私は、彼女にモーリシャスと私の夢の経緯を教えてあげ、「来月 13 日にモーリシャスに行き、彼に会いに行く事が出来るんです」と伝え、資料等を預けました。

翌日、早速取材の申し込みが有り、11月 1 日の新聞に大きく掲載されました。

### 高校時代に「How are you?」

大田区でそば店を経営するすずさん(68)が、高校時代に交遊していた男性と初めて対面するために18日、インド洋のモーリシャスに向かう。80年前に著者が渡船していたは、客が偶然乗っていた1枚の船はがすが、2人を引き合わせた。

#### 大田・そば店経営の すずさん

「How are you?」と、すずさんが、モーリシャスに渡船したとき、客が偶然乗っていた1枚の船はがすが、2人を引き合わせた。すずさんは、大田区でそば店を経営する。高校時代に交遊していた男性と初めて対面するために18日、インド洋のモーリシャスに向かう。80年前に著者が渡船していたは、客が偶然乗っていた1枚の船はがすが、2人を引き合わせた。



## 海外文壇の7年後の初対面

### メールで再開 近くモーリシャスへ

著者の海外文壇の7年後の初対面

著者の海外文壇の7年後の初対面。すずさんと著者の初対面は、80年前に著者がモーリシャスに渡船したとき、客が偶然乗っていた1枚の船はがすが、2人を引き合わせた。すずさんは、大田区でそば店を経営する。高校時代に交遊していた男性と初めて対面するために18日、インド洋のモーリシャスに向かう。80年前に著者が渡船していたは、客が偶然乗っていた1枚の船はがすが、2人を引き合わせた。

### 37年越しの初対面

34年ぶりに文通を再開した私と Jean Pierre さんは、ついに 2003 年 11 月に念願の初対面を果たしました。

11 月 13 - 14 日、香港から 10 時間のフライト。私は夢にまで見たモーリシャスの地に到着。心地よい南国の夜風が私達を出迎えてくれました。

初めてのモーリシャスの朝は小鳥たちの声で目を覚まし、外へ出てみると雲ひとつない快晴、空気の美味しさも感じられる、ヤシの木の間からは真っ青な海が望めます。どこまでも続く海の青と砂浜の白のコントラスト、水平線が2本有るのにはビックリでした！

11 月 15 日、ついに Jean Pierre さんに会う日がやってきた！東京上野出身のみど



りさんとモーリシャス人のご主人、子供さんと一緒に、車でローズヒル方面へ。

ローズヒルの街は、不思議と初めて訪れたという感覚は無く、自然と Jean Pierreさんの前に立ち、気づくと声をかけていました。

「 Nice to meet you ! My name is Suzu! 」



同伴してくれたみどりさんの「37年越しで実現した初対面です！」との言葉に

「ハッ」と我に帰り、私はどれほどモーリシャスに来たかったか、どうやって Jean Pierre さんを探し出すことができたのか、日本から持って行った新聞の記事を見ながら、みどりさんの通訳で彼に語りかけました。

文通を覚えていてくれた Jean Pierre さんとは、まるで37年来の友人のようにすぐに打ち解け、楽しく感無量の初対面となりました。

11月16 - 18日、Jean Pierre さんご夫妻が私達にモーリシャス案内をしてくださいました。首都ポートルイスを望む高台にあるアデレード砦、パンプルムース植物園、カセラバードパーク、ブラックリバー峡谷、フローリアルでの買い物など、初めて会った彼とモーリシャスで楽しい時間を過ごすことができました。

近くに住む弟さん、妹さん達も食事に連

れて行ってくださり、観光や買い物に付き合ってください、とてもフレンドリーな方々ばかりでした。

毎日、感動、感謝、感激の連続でした。しかし、インド洋に沈む夕日のデッカイ太陽はなかなか観る事ができません、、、

11月19日、モーリシャス滞在の最終日。Jean Pierreさんは「もっと綺麗な海をお見せします」とおっしゃり、私達をトゥル・オ・ビッシュ、グラン・ベなどの海岸に連れて行ってくれました。美しい海岸を走る事5～6カ所、全て海の色が違います。最北端の海の色は信じられない位青い！

あまりの美しさのため言葉に表せないほど、感動を覚えました。



途中、日本人が働いている場所が有ると  
いうことで、立ち寄ってくれた工事現場で  
モーリシャスに来て初めて日本人に会いまし  
た。政府管掌（かんしょう）で船の研修セン  
ターを造っている場所でした。

入り口の所で、日本語で上手に話す黒人  
男性と会いました。

昔、清水港で働いていたという方で、今で  
もモーリシャスに行くと必ず会いに来て下さ  
り、毎年クリスマスカードを届けてくれます。

## Mountain cannot meet, but people can

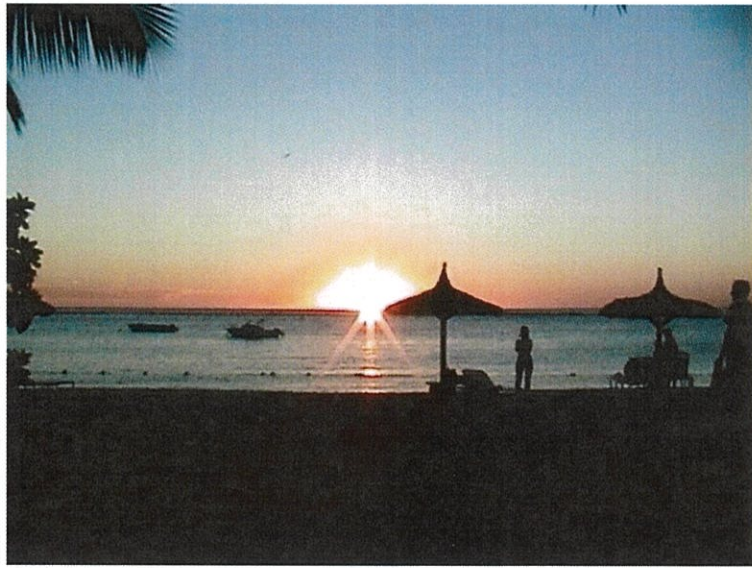
5日間の有意義な時間を過ごすことができた Jean Pierre さんと、お別れの時がやって来ました。

「すずさんは一番の友人」そう言ってくれた Jean Pierre さん、私も同じ思いですと伝え、私達は近い将来の再会を約束しました。

この日の夕方には、ついに念願のインド洋に沈む夕陽を眺めることができました。真っ赤な夕陽がインド洋に沈む光景は、とても感動的で丸い太陽が歪んで見えました。

「神様ありがとうございます！ひろ子さんありがとうございます！ピエールさんありがとうございます！モーリシャスの友達ありがとうございます！」と叫んでいました。





彼は別れる時、この言葉を私の旅行日程表に書き記してくれました。

“ Mountain cannot meet, but people can  
“

この言葉はモーリシャスに伝わる“諺(ことわざ)”なのだそうです。「モーリシャスの山は山としてそこに在り、動くことは無いけれど、人は動くことができる、人と出会うことができる。色んな人と巡り合い、

交流を広げていくことができる」

出会いは人の人生を変えと言われておりますが、私たちの体験はまさにこの諺そのものでした。

たった1枚の写真から始まった、たくさん  
の出逢いと数々の奇跡の中で生みだされた、  
感動と感激と感謝にあふれた体験でした。

## 終わりに

たった一枚の写真とのめぐり会いから始まったこの体験は、長年「こうなったらいいなあ」と思い描いていた夢が、あっという間に現実となってしまった、本当に信じ難い出来事でした。

\* きっかけとなったポストカードの持ち主とのつながりは、我が家のお客様として普通に知り合ったアメリカ人とその息子さんでした。私と彼女のポストカードをめぐる会話は、いまでもはっきりと覚えております。

\* 「マイドリームに力を貸してください」と月刊モーリシャスの掲示板に書き込みをした時の期待と不安感。私の夢に力を貸してくださった方とのつながりも意外で、私の夢についての書き込みを見て気軽に力を

貸していただきました。

\* 写真を受け取った JNT のスタッフの皆様、みどりさんは以前たまたま問い合わせをした方でした。Jean Pierre さんと同姓同名の方が居合わせたのも偶然、居住地の見当が付きました。

\* そして、50歳から始めたパソコンを、使えるように教えてくれた息子の友人、セピア色の写真をコピーしてくれた友人、本当に感謝です。

\* 私の手記を読んで新聞に載せてくれた記者の方も、我が家のお客様の一人でした。

人と人との出会いが思いもかけない展開で広がったこの体験は、言葉に言い表すことが

できないほどの感動を伴いました。この感動を全部お伝えできたかはわかりませんが、多くの方に感動を与えることができたことは私の宝であることに間違いありません。

最後に 2004 年カリフォルニアの友人を訪ねた時のことです。

玄関に入ると、そこには今は亡きヒロ子さんの空間が広がっておりました。居間に入るとヒロ子さんの遺影が飾ってある棚が目に入り、周りには大切にしていたと見られる写真が数枚飾ってありました。何気なしに見入っていると、モーリシャスの写真が目についたのです！それも2枚も！一瞬鳥肌が立ちました。世界各国を旅してきた彼女が、モーリシャスの写真を大事に飾ってくれていた。病床で辛い時はいつも、「アルバムを出してちょうだい」と言っていたという彼女が、気に入ってくれていたのだと思った途端、涙が溢れてまいりました。何と云う巡り合わせなのだろうか？

彼女との出会いこそが、奇跡とも思える体験をさせてくれたのだと思います。